私を堕とせるのはただ一人？いや、ここからが恋人だし！

【第４話】

みなぎし　すい

【人物一覧表】

柊千咲…女子高生

白石彩夏…社長令嬢

神谷里見…女子高生

杉園愛梨…女子高生

飯田早苗…女優

柏木奈子…千咲の叔母

少女

少女の親

愛梨の父

愛梨の母…モデル

○女子高・校門（朝）

柊千咲、校門をくぐろうとする。

少女「お、おねえちゃん！」

千咲「あ、あの時の」

少女「あの時は、助けてくれてありがとうね！　はいこれ、いっぱいお菓子だよ！」

少女、千咲に袋詰めのお菓子を渡す。

少女の親「本当にありがとうございます」

千咲「いえいえ。きみが元気で、おねえちゃんもうれしいな」

少女「うん！」

千咲、少女の頭をなでなでする。少女、にっこり笑う。白石彩夏、その様子を遠くから眺める。

○同・3の3教室（朝）

いつもの5人が集まっている。

彩夏「決めた。わたし、会社継がないわ」

他4人「えっ!?」

彩夏「けさの千咲を見てて思ったんだ。もっ

と、誰かに笑いを届けられる職業につきたいって。だから、お笑い芸人とかなんでもいいから、人を笑わせる職業につく！」

飯田早苗「いいの？　柊なんかのために」

杉園愛梨「わ、わたしはいいと思う……千咲ちゃん優しいし」

神谷里見「そんな勝手にいいのかよぉぉぉぇ！」

彩夏「だって、もともと同族経営で私物化するのかって社員たちから言われてたし。ちょうどいいの」

里見「お前よ、ほんとはそういってただ」

彩夏「めーっ」

彩夏、里見の唇に人差し指をあてがう。

里見「な、なんだよ」

彩夏「そういうのは、自分以外が言っちゃだーめ」

里見「？」

彩夏「あ、里見ちゃん自分で気づいてない？」

里見「はぁ？　お前何言ってんだよ」

彩夏「気づいてないなら、取っちゃうよっ。

里見ちゃん、自分に正直になった方がいいよ～！」

彩夏、里見に笑顔を向ける。

里見「意味わかんねえ……なんだこの上機嫌？」

愛梨「千咲ちゃんと、仲直り、したからじゃないかな……」

里見「あぁ!?」

彩夏「そうそう！　詳しくは言えないけど！」

早苗「次泣かせたら許さないわよ、柊」

早苗、千咲を睨む。

千咲「はい……大切にします……」

彩夏「千咲ちゃん……わたしも、嬉しい。大切にするから」

彩夏、千咲を見つめる。

早苗「あたしとしては、柊が彩夏と離れてくれると嬉しいのだけれど」

千咲「里見ちゃんより毒舌!?」

彩夏「えー、もっと優しくしてあげなよ！千咲ちゃんにも」

愛梨「早苗ちゃんは風紀委員長だから、厳しいんだね」
千咲「とほほ……」

○同・自販機前
千咲、自販機でメロンソーダを買う。
千咲「推しの女優に嫌われちゃったよぉ……」
千咲、ため息をつく。
愛梨「千咲ちゃん」
千咲「愛梨ちゃん。どうしたの？」
千咲M「ああ、やっぱりふわふわした喋り方、癒されるなぁ……余計なこと考えなくていいし、これが友達かぁ」
千咲、ほわほわした表情になる。
愛梨「早苗ちゃんと、仲良く、したいの？」
千咲「だって、友達は多いほうがいいじゃん」
愛梨「そう、だね」
愛梨、少しうつむく。
千咲、愛梨を心配そうに見つめる。
千咲「愛梨ちゃんの家にお泊まりできたら嬉

しいなっ。前にしたいって言ってたし！」
愛梨「わ、わたしも嬉しい」
愛梨、にっこり笑う。

○同・愛梨の部屋（夕方）
たくさんの服がハンガーに吊るされたりしている。
千咲「すっご！　さすがモデル！」
愛梨「えへへ」
愛梨、頬を赤らめて笑う。
千咲、荷物を置く。
千咲「愛梨ちゃんはいろんな服着るの好きなの？」
愛梨「うん、好き、だよ」
千咲「これとか、清楚で似合うと思う！　お、おろした髪型とか？」
千咲、服を１着手に取る。
愛梨「えへへ、うれしい」
千咲「愛梨ちゃんは、好きを仕事にできてすごいなあ。わたし、夢を諦めちゃったんだ」

千咲、寂しそうな表情になる。

愛梨「そう、なの？」

千咲「うん。昔医者さん目指してたんだけど、ママの育児負担が増えて家族仲悪くなっちゃってさ」

愛梨「そっか……」

千咲「ねえ。愛梨ちゃんも友達だしさ。何かあったなら聞くよ」

愛梨「え、なんの、こと？」

千咲、愛梨をじっと見つめる。

千咲M「こういうのは、自分から言ってもらうべきだ。でも……わたし自身、いっぱい弱音を吐いて嫌われてきた。だから、せめてわたしだけでも受け止めてあげたい」

愛梨「あ、あのね」

愛梨、千咲に話す。

千咲N「愛梨ちゃんは、自分の過去の過ちをわたしに話してくれた。里見ちゃんから聞いたあの話と同じ内容だった。つまり、２人とも自分の感情で嘘をついたりしてない

ということだ」

愛梨、泣いている。

愛梨「千咲ちゃんにはね、話しておきたいなって思って……千咲ちゃんに嫌われたくないのに……変だよね」

千咲M「ふわふわしてスローペースなのは、罪悪感から恐怖を感じてビクビクしてるからだ。里見ちゃんが毒舌なのは、多分愛梨ちゃんに付きまとわれて毒吐くようになったから」

千咲「愛梨ちゃん。嘘をつかずにそのこと話してくれたのは、愛梨ちゃんがそれを心から後悔してて、償おうってがんばってるからなんだよ」

愛梨「なんで……嘘じゃないって思うの？」

千咲「あ」

千咲、はっとする。

千咲「愛梨ちゃんが、嘘をついてるように見えないから。友達を頼ってくれて、ありがとうね。わたし、優しくてかわいい愛梨ち

やんが好きだなっ」

千咲、愛梨を抱きしめる。

愛梨「あったかい……」

愛梨、涙を流しながら笑顔になる。

○同・浴室（夕方）

千咲と愛梨、湯船につかっている。

千咲「ふぅーっ！　きもちいー！　友風呂最高！　やっぱ、友達っていいなーっ！」

千咲、バンザイする。愛梨、千咲の綺麗な脇を見る。

愛梨「ね、ねえ」

千咲、愛梨を見る。

千咲M「やば、髪おろしたらめっちゃツインテと雰囲気違う……かわいい」

千咲「な、なに？」

愛梨「か、体……洗ってほしい。その……せっかく2人いるし、届かないとことか。だから……ね？」

千咲M「かわいい……ふわふわだぁ」

千咲、ほわほわした表情になる。
千咲「いいよ」
２人、湯船から出る。愛梨、風呂椅子に座る。
千咲「肌、綺麗だね……」
愛梨「あ、洗っていいよ……」
愛梨、頬を赤らめる。
千咲、愛梨の背中を洗い始める。
愛梨「ひゃうっ！」
愛梨、びくっと震える。
千咲Ｍ「な、ななな何今の反応!?」
愛梨「あ、く、くすぐったい、かも」
千咲Ｍ「ここんなえっちな反応されちゃったらドキドキしちゃうじゃん……って違うから！　えっちな目でなんて見てないから！」
愛梨「ま、前も洗って」
２人、向かい合う。
千咲「まま前も!?　ちょちょ、なんで」
愛梨「ちゃんと洗えるか見るために首曲げる

の、疲れるんだよね……だからお願い、洗って……？」

愛梨、千咲に上目遣いする。

千咲M「可愛すぎるでしょ〜っ！　てか、前もなんて恥ずいってば！　あ、あれが見えちゃってるし！」

※　※　※

（フラッシュ）

彩夏にキスされ、胸を揉まれる千咲。

※　※　※

千咲、顔を真っ赤にする。

千咲「じゃ、じゃあ、洗うね……」

愛梨「うん……」

千咲の心臓の鼓動が早く大きくなる。

千咲、愛梨の胸をスポンジでなでる。

愛梨「ひゃぁんっ！」

千咲M「ってやっぱ無理ー！」

千咲、愛梨から目を逸らす。

愛梨「千咲ちゃんっ」

愛梨、千咲を押し倒すように倒れる。

勢いで千咲の股が開かれる。
互いの胸が押し付けられる。
千咲「あんっ！」
愛梨「ごめ、んね……怪我、無い？」
千咲「な、ないけど……今動かないで」
愛梨「えっ」
千咲「む、胸が、その……お、押し付けられて、あれどうしが当たって……や、やばいからっ……」
千咲、赤くなった顔を両手で隠す。
愛梨、頬を少し赤くする。
愛梨「千咲ちゃん、好き」
愛梨、動く。
千咲「あっ！　ひぁんっ！」
勢いで、愛梨の膝が千咲の股に当たる。
千咲、腰をビクンと跳ねさせる。
○女子高・下駄箱（朝）
生徒たちが、靴を履き替えている。
千咲、靴を履き替える。

愛梨「千咲ちゃん、おはよう」
千咲「おはよ」
千咲、愛梨の方を向く。
千咲、どきっとする。
千咲M「ちち違うから！　今のはそういうんじゃないから！」

○同・3の3教室（朝）
千咲、早苗の席まで歩く。
千咲「ねえ早苗さん。勉強ちょっとわからないから、教えてほしいの」
早苗「お断りするわ」
千咲「えっ」
千咲、一瞬固まる。
その様子を見ている彩夏、愛梨、里見。
千咲「でも、彩夏の隣にいたかったら勉強してすごい人になってって」
早苗「はぁ……」
早苗、大きなため息をつく。
早苗「あなた何か勘違いしてるようだけれど、

あたしがあなたを歓迎していないって言ったのは、別に成績の話じゃないわ。前、成績がよければいいみたいに言ったけど本心じゃないの。確かに成績の悪いあなたが、とは思ってるけど、成績に関わらず、彩夏にくっつくあなたが気に入らないの」

早苗、千咲を睨む。

千咲M「ひえええっ！　眼光が怖いいいい！　里見ちゃんの毒舌キャラが機能しなくなるくらいの毒舌！」

千咲「す、スキンシップのことなら、彩夏が勝手にやってきてるだけだから……彩夏のことは友達として好きだけど」

早苗「調子に乗らないで」

千咲「ひいっ！」

早苗「それに何？　友達として、って。もしかしたらとは思ってたけど……なるほど。彩夏から？　あなた、彩夏の気持ちをもてあそんでいるのね。やっぱり、あなたが気に入らないわ」

千咲「あ……ごめんなさい……」

千咲、涙目でうつむく。そのまま席を立ち、ゲーム機を持って扉を開けて教室から出ていく。

彩夏「早苗」

早苗「何よ」

彩夏「今のはひどくない？」

早苗「彩夏に不義理を働く不届き者には、これくらいがいいのよ」

彩夏「なにそれ」

彩夏、早苗の頬を叩く。

早苗「彩夏」

彩夏M「こう言ったら千咲ちゃんにより敵意が向くかも。だけど友達として、はっきり言わなきゃ」

彩夏「千咲ちゃんは、過去にしんどいことがあって、今までがんばって来てたの。つらい過去を乗り越えて、いっぱい友達作ろうとしてる。そんな千咲ちゃんにひどいこと言うなんて、不義理を働いてるのは早苗の

方だよ」

早苗「柊と友達になった覚えなんてないけど」

彩夏「だから、それが千咲ちゃんの気持ちを傷つけてる。千咲ちゃん、きっと何度も折れて心がボロボロだから、わたしが、ううん、みんなでそばにいてあげなきゃいけない」

早苗「あたしは彩夏を敬愛して」

彩夏「それは嬉しいし、早苗のことはよく知ってるから嫌いになったりしないけど、千咲ちゃんを傷つけるなら、敬愛なんていらない。これは、わたしが早苗をって好きじゃないって意味じゃないから」

里見「お前らの関係にお前ら以外が言うのもなんだけどよ、千咲のやつすっげえ優しかったぜ」

愛梨「うん。だから……千咲ちゃんにそんな、ひどいことは、言うべきじゃないよ……」

里見と愛梨、訴えかけるような視線を早苗に向ける。

彩夏、自分の胸に手を触れる。

彩夏「わたしも、前に千咲ちゃんと喧嘩しちゃってさ。そこでちょっとはここが強くなったつもりだから、早苗のこと嫌わずに待ってる。だから、千咲ちゃんと仲良くしてよ」

早苗「っ……」

早苗、涙目になる。

彩夏「早苗？」

早苗「はっ。な、何見てるの！　なんでもないわ！」

早苗、涙を拭く。

早苗「ちょっと、外の空気吸ってくるわ。授業開始までには戻ってくるから」

早苗、悔しそうな表情でずかずかと歩きながら教室を出る。

○同・屋上（朝）

千咲、屋上でゲームしている。

○同

千咲「電池切れた……いや、それより授業さぼっちゃった……まあ、スマホゲームすればいっか……いや、寝よう」

千咲、ゆっくり目を閉じる。

千咲M「嫌なことあった時、ママに怒られたり奈子おねえさんに心配かけたりしないために、こうやってとりあえず学校来てはさぼってたっけ」

○同（夕方）

千咲「そろそろ帰ろう。みんなすごいから用事とかあるだろうし、さすがに帰ってるでしょ」

千咲、ゆっくり立ち上がる。

千咲「もっと強くならなきゃな、わたし」

○同・3の3教室（夕方）

千咲、扉を開けて中に入る。

千咲「あれ、愛梨ちゃん」

愛梨「待ってたよ」
千咲「どうしたの？」
千咲、愛梨のもとまで歩く。
愛梨「千咲ちゃん、大丈夫？」
千咲「あ、うん」
千咲、ぽろぽろと涙を流す。
千咲「あれ」
千咲の表情が悲しみでゆがんでいく。
千咲「あ、だめだ……彩夏といれないの、悲しいよ」
愛梨「大丈夫、彩夏ちゃんといれば、いいと思う……」
千咲「でも、嫌われるのが耐えられない」
愛梨「そっか……そうだよね。わたしも、里見ちゃんに嫌われてるから、わかるよ」
千咲「わたしたち、どうすればいいんだろうね？」
千咲の涙が床に落ちる。
愛梨「こうすれば、いいんだよ」
千咲「んっ」

愛梨、千咲と口づけする。直後、唇が
離れる。
千咲「愛梨、ちゃん？」
愛梨「嫌われちゃった者どうし」
愛梨、千咲の涙を指でそっと拭く。
千咲M「どうしよう、つらい。苦しい。逃げ
出してしまいたい。正直……愛梨ちゃんと
キス、嫌じゃない」
千咲「い、いい、よ。愛梨ちゃんとなら」
愛梨「ありがと」
2人、口づけをする。
千咲M「ああ、あったかい……わたし、愛梨
ちゃんみたいな優しい子を、求めてたのか
な……」
唇が離れる。
愛梨、千咲の胸を触る。
千咲「あ、そこは」
愛梨「だめ、だった？」
愛梨、手を離す。
千咲「ううん」

千咲、愛梨の腕を掴み、愛梨の手を自分の胸にあてがう。
千咲「今は、いっぱい慰めてほしい」
愛梨「そっか……うん、わかった」
愛梨、千咲の胸を揉んでいく。
千咲「あんっ、あんっ、あんっ、あんっ」
愛梨「かわいい」
千咲「あんっ、そこ、もっと」
愛梨「下、は？」
千咲「……それは絶対だめ、恥ずかしいから」
愛梨「うん、わかった」
愛梨、千咲の胸の突起をつまむ。
千咲「あっ、あっ、そんな、そんなにつねられたらっ……」
愛梨「どう、なっちゃうの？」
千咲「い、イク……」
愛梨「じゃあ、つねるね」
愛梨、両手で突起をつまむ。
千咲「ひあんっ！　あっ！」
千咲、喘ぎながら制服のボタンを外し、

ブラをめくって胸を丸出しにする。
千咲「友達同士、なら見せあうくらい普通だし」
愛梨、千咲の乳首を口でくわえる。
千咲「あんっ！　あんっ！　イク、イク、イク！　イク！　もっと、もっとちゅうちゅうしてっ！」
愛梨「いい、よ」
愛梨、思いっきり乳首を吸う。
千咲「イク！　イくぅぅう！」
千咲、体をビクンと震わせる。